

自己イメージの歴史的変遷について

斎藤環

筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

Transition of Self Image in Historical Perspective

Tamaki SAITO

Professor, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

How do you imagine yourself? According to the science of psychoanalysis, the idea of the self is an imaginary construct. It is a kind of image, a product of the imagination that comes from narcissism, and a screen that reflects an image about oneself or the meaning of oneself. In that sense, the self is far from the “truth.” If you wish to reach the truth, you need to reach a hidden, unconscious truth through the “false screen” of the self. At the same time, however, the self, which is a “false” self-image, can change with the times and mirror society and culture. Here I discuss the transition of self-image from the 1990s onwards.

A self-image has the two major functions of ensuring absolute generality and absolute identity: in other words, recognizing the generality that you are “the same as other humans” and simultaneously your identity as “a sole entity.” From this perspective, it can be said that the transition of self-image with the times is a repetition of placing emphasis on these two kinds of recognition in alternate order. In the period from the end of the war until the mid-1980s, during which importance was placed on the pursuit of material comforts and mental fulfillment, people sought to enhance the value of self-image by general standards. From the mid-1980s to the mid-1990s, a period in which much value was attached to a sense of self-identity, people pursued the value of a psychological identity more than the general value. For the decade from the mid-1990s, when more emphasis was placed on “recognition as a character,” however, people sought to pursue a more general symbol of personality called “a character.” Between the mid-2000s and the 2010s, those exhausted by playing a certain character gradually came to long for an identity unrelated to their sociality (or a developmentally disabled identity). As just described, the value of self-image seems to have shifted from generality to identity to generality and again to identity.

Then, what kind of self-image is coming next? Considering some signs that can be seen at present,

I expect that a self-image based on “the body” will be pursued

はじめに……「神経症の時代」から「精神分裂病の時代」へ

自己とはなにか。古典的な精神分析においては、自己と自我を区分する。自己とは無意識を含む「私」の全体を意味しており、自我は「自意識」として、そのごく一部をなすにすぎない。しかし、本稿の趣旨に即して、ここでは「自己」をあえて狭く「自己イメージ」としておこう。

私が私自身をどのようにイメージするか。ふたたび精神分析によれば、自己とは想像的なものである。それはイメージの一種であり、それゆえにナルシズムの産物であり、イメージや意味が反映するスクリーンでもある。その意味でほんらい、自己は「真実」からは遠い存在である。人が真実に到達しようと思うなら、自己という「嘘のスクリーン」を通過して、隠蔽されていた無意識の真実に到達しなければならない。

しかしまた、自己（イメージ）は「嘘」であるがゆえに、時代とともに変容し、社会や文化のありようを鏡のように映し出す。本稿では、主として1990年代以降の自己の変容に焦点を当ててみたい。本稿の構成をあらかじめ予告しておこう。

ごく大雑把ではあるが、私は戦後の精神史を五つに区分できると考えている。

60年代までを「神経症の時代」

70年代~80年代中期までを「統合失調症の時代」

80年代中期~90年代中期までを「境界例の時代」

90年代中期~2000年代中期までを「解離の時代」

2000年代中期~2010年代を「発達障害の時代」

具体的な年代区分については私自身にも複数の解釈があるので特にこだわるつもりはない。重要なことは、ここに示した神経症→統合失調症→境界例→解離→発達障害という疾患名の変遷順のほうで、この点については精神科医にも異論は少ないだろう。もちろん「摂食障害がない」とか「ひきこもりはどうした」とか「現代は認知症の時代ではないのか」といった異論はありうる。しかし時代を象徴する、いわば「隠喩としての病」という意味においては、この区分は大きく外してはいないはずである。

本論ではこのうち、90年代以降について集中的に考えるが、容易に理解される通り、ここに上げた疾患名は、その時代ごとに求められた「望ましい自己イメージ」の陰画という意

味もある。

社会学者の大澤真幸は、70年代初頭までを「欠如の時代」と呼んだ（『戦後の思想空間』ちくま新書）。これは端的に物質的、経済的な欠乏が人々を動かしていた時代であり、この時代において人々は自らの欲望の自明性を疑うことなく、物質的な充足を目指すことで理想的な自己が達成されるという意識が広く共有されていた。こうした欲望の自明性なくして高度成長期のような特異な時代は支えられないだろう。

欲望の自明性を疑わない自己が理想とされる時代においては、内省的な自己意識とともに自らの欲望の不合理性に苦しめられる「神経症」こそ、時代の陰画と呼ばれるにふさわしい疾患であった。ちなみにラカン派の文脈では、「神経症」は人間の正常な存在様式のひとつとみなされる。言語機能とともに内省し葛藤する存在こそが人間である、というわけだ。私はその発想を支持するが、ここではこの議論に深く立ち入ることはしない。

閑話休題、物質的な欠乏がそれほど重大事ではなくなった時代を、大澤は「欠如の不在の時代」と呼んだ（前掲書）。物質的欠乏が充足されていくにつれ、いたずらな物欲の追求は終わり、かつてないほど精神的な充足が求められるようになったのである。ハウツー本やマナー本がベストセラー上位を占めていた60年代とは打って変わって、70年代は渡部昇一『知的生活の方法』に代表されるような、内面の充足を求める方向に理想的な自己イメージがシフトしていったのである。

この時代を象徴する疾患が「統合失調症」である。当時は「精神分裂病」と呼ばれていたが、その難治性と慢性化率の高さ、変容した内面のはかりがたさという意味から、一部では「精神のガン」と恐れられていた。あるいは精神医学における究極の謎という意味では、聖別化された崇高なる疾患という位置づけを持っていた。幻覚や妄想といった症状を呈し、時に無言で硬直する昏迷状態や支離滅裂な言動に至るこの疾患は、いわゆる「狂気」のステレオタイプ（≒スティグマ）の主要な源泉である。ドゥルーズが資本主義社会の隠喩として分裂病を象徴化し、それを受けて浅田彰が「スキゾとパラノ」を流行させるなど、この疾患は少なからぬ誤解をはらみつつも80年代初頭までの時代を象徴する疾患となった。

内面の充足を理想とする時代において、なぜ分裂病がその陰画となりうるのか。それはこの疾患が精神の究極の破綻とも言うべき様相を呈しつつ、その破綻において人間の精神が新次元に飛翔しうるかのような期待を集めるという両義性が込められていたためである。少なくとも80年代までの現代思想界限には、そうした意味での「分裂病の崇高化」が見受けられた。究極の破綻と究極の充実は表裏一体、というほどの意味である。

境界例の時代

この後、時代は徐々に「境界例の時代」へと移行することになる。しかし「自己」という

ことについて言えば、この時期に隆盛を極めた「アイデンティティ (自己同一性)」概念についてふれないわけにはいかない。

自己同一性とは、自分が何者であるかについて、他者から区別するための概念、信念、および表現を指す言葉である。「これこそが自分自身である」と言いうるためには、自己の社会的な位置づけ (家系や所属などを含む) に加えて、主体性、独自性、過去からの連続性といった感覚が重要となる。この概念を提唱した精神科医、エリク・エリクソンは、アイデンティティ獲得を青年期の重要な発達課題とみなしていた。エリクソンがこの概念を提唱したのは1950年代であるが、その翻訳である『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』(誠信書房)の出版が1973年、そして私の記憶によれば、この概念が日本で人口に膾炙するのが1980年代だった。

この事実はいへん示唆的である。先述した通り、80年代後半から時代の風潮は「境界例の時代」へと変わっていく。これは内面的な充足以上に、「自分探し」が求められる時代への変容を意味している。しかもここでいう「自分探し」とは、実質的には心理学的な意味での自分探し、すなわち自己同一性の探求と読み替えることも可能になるからだ。

それではなぜ、自己同一性の探求が「境界例の時代」をもたらしたのか。

まずは「境界例とはなにか」について、簡単に確認しておこう。

境界性人格障害 (=ボーダーライン、境界例) の存在が注目され、理論的にも深化されたのは1970年代だった。しかし少なくとも、日本においてブーム的な注目を浴びたのは1980年代の後半に入ってからである。私は院生時代に、研究テーマとして境界例を取り上げていた時期があったが、この選択に当時のブームの影響が無かったといえば嘘になる。

境界例は精神疾患と言うよりは、パーソナリティ障害、つまり「偏った性格傾向」に位置づけられる。私なりに境界例人の特徴を述べるなら「対人関係のなかで、繊細で不安定、かつ衝動的な性格という印象を与える人」とでもなろうか。今風に言えばいわゆる「メンヘラ」がこれに近い。理解不能なほど病んではないが、日常でつきあうにはいささか「面倒」な人。境界例を説明するさいに、私がしばしば太宰治を引用するのは、太宰自身がというよりは、その作品 (『人間失格』など) に描かれる人物が、きわめて境界例的にみえるからだ。

その精神病理をここで詳述する余裕はないので、ごく簡単に述べておく。

境界例の病理の基本にあるのは「分裂 splitting」(M.クライン) である。念のために言い添えておけば、これは分裂病とは無関係の言葉で、要するに物事を「白か黒か」で考える「百ゼロ思考」のことだ。グレイゾーンを許容できないという意味では、未成熟な思考形式のひとつでもある。この思考パターンが強い人は、対人関係においては「敵/味方思考」にはまりやすい。敵とみなした相手は激しく攻撃する一方で、味方とみなした相手のことは崇拜し、絶対化し、べったり依存する。

ただし、味方と思っていた人が少しでも自分の意に沿わない言動をとると、手のひらを返

すように敵認定して攻撃対象にする。さらに問題なのは、彼らが相手に対して感じている怒りの感情を、しばしば相手に投影することだ。自分が相手に怒っているのに、逆に相手は自分に対して攻撃してきたのだと妄想的に確信することがしばしば起こる。これは「投影性同一視」と呼ばれる心理メカニズムである。彼らが「人中毒」と言われるほど対人関係に依存しているにもかかわらず不安定化しやすいのは、こうした振れ幅の激しい対人評価の不安定さが原因だ。

ついでに言えば、ここで述べた「分裂」や「投影性同一視」は、非患者にもしばしばみられる心理メカニズムである。身近にいる配偶者や親などに対して、強い怒りや憎しみを掻き立てられる経験をしたことがある人は、このどちらか、あるいは両方を経験したことがあるはずだ。その意味で境界例は、私たちとまったく無縁の「病気」ではない。これに近い状態には、一過性には誰でも陥る可能性がある。境界例とは、それがほぼ常態化した人に与えられる診断名だ。

境界例のもう一つの特徴は、自分の不安定さや苦しさを理解しようとして、心理学や精神分析を学ぼうとする人が多いことだ。学ばばかりか、良い治療者を求めてドクターショッピングを繰り返す患者も少なくない。しかしここでも、彼らの極端な対人評価が問題となる。良い治療者を見つけたと感じられれば、彼らは治療者を崇拜し依存することで一時的に状態は安定する（いわゆる「転移性治癒」）。しかし、わずかな行き違いから治療者に不満を感じると、それまでの崇拜がたちまち怒りと怨念に反転し、治療者を激しく攻撃したあげく、しばしば治療は中断する。かくして患者は、次の理想的な治療者を求めてさまようのである。結果的に彼らは、心理学や精神医学のさまざまな知識や治療現場の裏事情に通じた、治療者側からすればまことに「厄介な患者」として敬遠されがちになる。事実、日本の臨床家の多くは、治療者の指示を聞かず、理屈っぽく面倒な患者に「境界例（境界性パーソナリティ障害）」の診断を「屑籠的」につける傾向がある。

心理学化する社会

私はかつて境界例を「メタ神経症」「メタ・ヒステリー」と呼んだが、これは境界例患者が、自己治療の努力として心理学や精神分析を学ぼうとし、結果的にいっそう症状から抜け出しにくくなるという事態を意味している。自分の症状の言語化や洞察が深まれば改善が起こる、という神経症の治療モデルとは逆の事態が起こるのである。

ラカン派哲学者であるスラヴォイ・ジジェクは、境界例について「ヒステリーの現代的な形態であり、つまり、患者が、呼びかけを実行するのが従来の〈主人〉ではなく、科学の言説の『専門知識』であるということを示す存在であり、「従来の〈主人〉から〈知識〉によって正当化される〈権力〉への移行」がみられるとしている（『仮想化しきれない残余』青土社）。

これを私なりに言い換えるなら、境界例とは、現代をおおいつくした「心理学化」というイデオロギーに対する異議申し立てなのだ。ここにおいて明らかになるのは、自己理解が治癒を促す神経症モデルから、自己理解が病理を強化する境界例モデルへの移行である。

ここで「心理学化」についても若干の解説を加えておこう。

「心理主義化」と呼ばれることもあるこの風潮は、1980年代から1990年代において、日本のみならず全世界を席卷した。このブームについては、私はかつて『心理学化する社会』（河出文庫）という著作で批判的に論じたことがあるので、詳細はそちらを参照されたい。

社会の心理学化とはどういうことか。簡単に言えば、社会や人生における問題（とりわけ犯罪）の多くが、心理学的視点から解釈されるようになり、個人の幸福の追求、ことに「自分探し」の答えまでも心理学がもたらしてくれる、という期待が広く共有される社会、という意味である。ちなみにここでは、心理学は精神医学とほとんど区別されない。ほぼ同一か、どちらかがどちらかの一部、という認識にとどまっている。

こうした風潮のもと、犯罪の原因はトラウマや発達障害といった個人心理のうちに求められるようになり、政治の問題も為政者の心理问题として理解されるようになる。よってメディアは、さまざまな場面で心理学者や精神科医のコメントを求めるようになる。精神科医がマスコミにひんばんに登場するような特殊な事態は、それ以前の時代にはほとんど見られなかった現象である。

ベストセラーランキングを見ても、90年代はかなり特異だ。

1992年のベストセラー一位は「それいけ×ココロジー」である。これは日本テレビ系列で放送された同名番組の書籍化である。同番組は出演者に心理テストを受けさせたり精神分析まがいのことをさせたりすることで深層心理を解き明かすといった趣旨の内容で、当時の心理学ブームを先導した。ちなみに同年には河合隼雄の『こころの処方箋』もランキング九位に入るなど、きわめて象徴的な年であった。

この時期以降、どの書店にも必ずといっていいほど心理学書のコーナーがもうけられ、大学の心理学科の競争率は受験人口の減少にもかかわらず、ほぼ高止まりするようになった。当時のリクルートのアンケート調査でも、女子高生のなりたい職業の第二位が「カウンセラー」だったという事実もある。「カウンセラー」あるいは「臨床心理士」は、当時の若者にとっての憧れの職業だったのである。この時代を代表するキーワードのいくつか、「トラウマ」「ストレス」「カルト」「癒し」「エコロジー」「心の闇」「プロファイリング」などは、ここでいう心理学化と浅からぬ関係がある。

さらに当時は、フィクションの世界も一大トラウマ・ブームという様相を呈していた。もはやいちいち作品名は挙げないが（詳しくは拙著を参照されたい）、小説でも映画でも音楽でも、物語を進める上でトラウマは必須の要素になりつつあった。ハリウッド映画の心理学化は、クリストファー・ノーランの傑作「バットマンダークナイト（2008年）」がその息の根を止める

まで続いたのである。

その後心理学化はようになったか。フィクション界限での扱いは縮小される一方、アカデミアの内部では確固たる地位を確立し、メディア的には「脳科学」と看板を付け替えて延命した。2000年代以降の「脳科学」ブームの本体は、心理学ブームとほとんど変わらない。使用される専門用語の違いと、いっそう自己啓発臭が強化されたことを除けば、内実はほぼ同質のブームである。ただし、人間の社会行動が現時点ではまだ一度たりとも「人間の脳の働き」と直接に関連付けられたことがないという事実を鑑みれば、脳科学はたぶん「未来の科学」と呼ぶのが正当なのだろう。

閑話休題、以上の流れをまとめるなら、次のようになる。最初に求められたのは、心理学的な意味での「アイデンティティの確立」だった。それは世俗的には「自分探し」の欲望につながり、それに答えを与える学問としての心理学ブームが社会を席卷した。しかしブームはその陰画として、心理学や精神医学では救われ難い患者である「境界例」を生み出した（これは隠喩的表現であり、私が臨床家として境界例の病因を心理主義にある、と断定したいわけではない）。しかし心理学の世俗の人気は退潮するとともに、境界例の事例を徐々に減少していった。

もちろん境界例が実際に減少したかどうかには異論もある。しかし少なくとも、私が知る臨床現場において、出会う機会が激減しているのは事実だ。他の臨床家から同様の感想を聞く機会も多い。

「解離」の時代

それでは「境界例=分裂 splitting」の時代が終焉したあと、何がもたらされたのか。

それが「解離 dissociation」である。

「トラウマ」や「転移」といった言葉ほどには知られていないこの言葉についても、ここで簡単に解説を加えておこう。わかりやすさを優先したので、部分的には厳密さを欠く記述がある点をご容赦願いたい。

「解離」とは、「抑圧」などと同様に、防衛機制の一つであり、強いトラウマやストレスなどから心を守るためのメカニズムである。あえてひとことで言うなら、「解離」とは、人間の心における時間的・空間的な連続性が切断されることだ。抑圧がストレスやトラウマを無意識の方に垂直に押し込む身振りなら、解離はストレスやトラウマを抱え込んだ心の部分を、いわば水平に切断してわきに押しやる身振りに例えることも可能であろう。

抑圧や分裂と同様に、解離も本来は健全な心のはたらきの一つである。たとえば失恋であれ肉親の死であれ、突然の大きな喪失体験は、ひとの感覚を一時的に麻痺させる。これは目的論的にいえば、心に感覚的な隔壁を設けることで苦痛を解除させ、心が事態を少しずつ、時間をかけて受け入れられる態勢を整えるために「解離」を起こしている、という言い方も

不可能ではない。

「正常範囲」の解離の例はほかにもある。ロックコンサートやTVゲームなど、何かに没頭する体験においてもしばしば解離は起こる。ノイズを遮断し、視野を狭くして目前の作業に没頭するためには、感性や知性に壁をもうけるほうが効率が上がる場合もあるだろう。精神療法の一種（にして起源）である「催眠」は、人工的に解離を起こすための技法の一つであり、催眠によって起こる現象は、ほぼすべて解離状態として説明することができる。宗教における光惚体験においても解離は起きていると推定されるし、カルトなどのマインドコントロールも、解離状態を人工的に引き起こすための、さまざまなテクニックの集積とみなすことが可能だ。

このように、病的とは言えない解離の例は少なくないが、その一方で、解離がセルフコントロールを超えて生じる場合は、「解離症状」と呼ばれる病理現象になる。本来は防衛機制であるはずの「抑圧」が神経症をもたらし、「分裂」が境界例につながるのと同じ意味において、「解離」も病理化するのである。

専門的な解説をつらつら書き連ねるのも気が引けるが、「解離」についての最低限の理解のために、あともう少し、おつきあいねがいたい。

解離のもたらす病理は、解離が心のどのレベルまで「隔壁」をもたらすかによって異なってくる。

たとえば感覚のレベルで解離が生じると、自分が感じていることが現実味を伴って感じられない「離人症」と呼ばれる症状となる。もっともこの言葉は、最近ではあたかも幽体離脱のように、自分自身の姿をもう一人の自分が外から眺めているかのような感覚（「体外離脱体験」）を指すことが多い。いずれも感覚が自分のものではなくなったように感じられる点では共通する現象と考えられる。

解離が記憶のレベルで生じると、「解離性健忘」が生じる。その最も重症なものは「全生活史健忘」で、これは俗にいう記憶喪失である。ここでは記憶のレベルで解離が生じており、自分の名前や生年月日はおろか、これまでの人生の記憶をきれいさっぱり忘れてしまう。ただし、そのとき損なわれるのはあくまでも個人的な記憶であり、これを「エピソード記憶」と呼ぶ。「意味記憶」、すなわち一般的な知識や常識は保たれていることが多いので、日常生活はいとなめる。こうした記憶のレベルの解離が行動にまで及ぶと「解離性遁走」が生ずる。これは俗に言う「蒸発」のことで、記憶を失うばかりか遁走中に別名を名乗り、別人になりすましてしまう場合もある。もっとも「全生活史健忘」や「解離性遁走」は、昨今ほとんどみかけなくなった。

解離現象を代表する疾患が多重人格、正しくは「解離性同一性障害 Dissociative Identity Disorder（以下 DID）」であることに異論は少ないだろう。解離が人格レベルにまで及んだ結果、一人の身体を多数の人格が共有するに至った状態である。人格の数は数人から時に数十

にも及ぶ場合があり、それぞれがことなった名前や記憶を持っている。年齢や性別もさまざまである。人格の間には知覚や記憶の隔壁があり、ある人格のとした行動を、別の人格は記憶していないことが多い。1980年代から90年代にかけて、北米を中心に発症率が急増し、わが国でも比較的まれではあるが、珍しい疾患ではもはやない。

DIDの原因としては、しばしば幼児期の虐待体験をはじめとするトラウマが指摘されることが多い。虐待のような激しいストレスを経験すると、子どもは別の人格を生み出し、「このつらい経験は自分ではなく別の子どもが経験しているのだ」と転嫁することで心を守ろうとする。その結果、別人格が生み出されると説明されることが多い。実際それは一定の有効性があるため、強いストレスがかかるごとに別人格が生まれて人格の数が増えていく。これがもっともシンプルなDIDの発症メカニズムである。人間の人格システムの基本メカニズムから説き起こすような壮大な仮説もいくつかあるが、私は個人的にはこの程度の解説で十分であろうと考えている。

いまだに根強い詐病説についての私の回答はこうだ。精神分析の文脈では演技と症状は截然たる区別ができない。どんな演技もあるところまでは症状的だし、どんな症状にも演技的な要素は含まれる。さらに言えばその患者が、少なくともリスクを犯してまで多重人格を演じ続けているという状態に対して、医療的支援が無意味であるとは思えない。

「承認」「コミユカ」「キャラ」

閑話休題、こうした「解離ブーム」には、どのような自己イメージが投影されているのだろうか。

結論を先に言えば、この現象は、90年代なかばから現在まで連綿と続く「承認の時代」を象徴していると考えられる。

それ以前の「(心理学的な)自分探しの時代」においては、若者の不安は「自分が何者であるか」という「実存の不安」が多くを占めていた。しかしその後、こうした不安は徐々に退潮し、代わって「承認の不安」が前景化してきたのである。これは理想の自己イメージが「他者から承認される自分」にシフトしたことを意味している。この時代におけるキーワードを三つ挙げるなら、「承認」「コミユカ」「キャラ」となるだろう。以下、順を追って説明する。

現代の若者の生活全体を承認欲求が覆っている。この状況を私は「承認依存」と呼んでいる。これは構造的な問題であり、「ひきこもり」や「うつ」の原因に至るまで、深いレベルで浸透している。例えば就活自殺の増加などは、承認依存の帰結という側面もあると考えられるが、もちろん他の要因も考えられる。総じて承認依存の状況を統計データとして示すことは難しい。拙著『承認をめぐる病』(日本評論社)が論文集であったにもかかわらず予想以上に広く読まれたことや、精神科医の熊代亨の著書『認められたい』(ヴィレッジブックス)の記述

などを読むにつけ、立証困難ではあるが異論の少ない状況認識ではあるであろう。

承認依存においては、「他者からの一方的な承認」への依存が主体である。言い換えるなら、そこには「自己承認」や「相互承認」の要素が乏しい。他者から認められずとも、自分の才能や能力、地位や家柄などを自信の根拠とするような自己承認が乏しく、承認の双方向性という基本的な要素を欠くことは、「いま得られている承認をいつ失うかわからない」という流動性の不安と紙一重である。これが「承認の不安」であり、多くの依存症の根底に不安があることを踏まえるなら、こうした「承認の不安」が現代的な「承認依存」をもたらしたとしても不思議はない。

物質依存には依存対象となる物質があるが、承認依存は「何」に対する依存となるだろうか。さまざまな表現がありうるが、端的に言えば「他者とのつながり」である。つまり「承認依存」とは「つながり依存」を意味する。

つながり依存の背景には、通信環境の変化が大きく関わっている。とりわけ 1995 年以降の商用インターネットの爆発的な普及と、ほぼ同時期の携帯電話(2000 年代以降はスマートフォン)の普及は若者のコミュニケーション様式に革命的な影響をもたらした。こうした通信インフラの発展に加えて、2000 年代以降は SNS と呼ばれるサービスが普及した。代表的な SNS には「LINE」「Facebook」「Twitter」「Instagram」などがある。相互承認の手続きを通じてネット上にゆるやかな内輪のコミュニティを形成し、「いいね！」ボタンに象徴される承認のサインを相互に送り合うのが作法である。承認の量を手軽に可視化、数量化できる利便性ゆえ、SNS は瞬間に若者の間に普及した。スマホさえあれば、友人や恋人と 24 時間つながっていることが可能となったのである。本来なら「承認」とはきわめて多様な形式を持つのだが、こうしたコミュニケーション環境のありようが、「承認=つながり」の一元化をもたらしたと考えられる。

「承認=つながり」の一元化は、若い世代の対人評価に甚大な影響をもたらした。筆者はそれを「コミュカ偏重」と呼んでいる。これは、対人評価の基準がほぼ「コミュカ≒コミュニケーション・スキル」に集約されてしまうような事態を指している。コミュニケーションであることは無条件に善とみなされ、コミュニケーション・スキルの有無は、就活などをはじめとして、しばしば死活問題に直結する。

この点についても定量的な根拠を示すことは難しい。しかし、社会文化的ないくつかの事象を検討することで、コミュニケーション偏重という風潮を可視化することは可能だ。企業などが採用の場面において「コミュニケーション・スキル」を重視し始めたのも最近の傾向である。社会教育学者の本多由紀は、この傾向をハイパー・メリトクラシーと呼んで批判した。かつて日本におけるメリトクラシー(業績主義)は、学歴社会や偏差値至上主義として批判された。現代におけるハイパー・メリトクラシーとは、学校の成績以上にコミュニケーション・スキル(曖昧に「人間力」などと呼ばれる場合もある)を重視する風潮を指している。現代の日

本社会においては、勉強ができる以上に、対人関係を円滑に進める能力が重視される。つまり、個人のコミュニケーション能力は就職活動や職場においても不断に評価の対象となるのである。

企業に限った話ではない。今や全国の中学や高校に浸透している「スクールカースト（教室内身分制）」において、生徒の階層を決定づける最重要要因はコミュニケーション・スキル（「コミュカ」）であるとされる。私の臨床経験からも、コミュカが低いとみなされてカースト下位に転落し、そこから不登校やひきこもりに至ったと考えられるケースが少なくない。

先述した「承認依存」と「コミュカ偏重」は、相互に補強し合うような関係にある。コミュカが高ければ多くの承認を獲得できる一方、コミュカが高い個人ほど他者からの承認に依存する傾向が強いからだ。そして、この2つを媒介するのが「キャラ」の存在なのである（キャラの詳細については、拙著『キャラクター精神分析』（ちくま文庫）を参照されたい）。

どういうことだろうか。実は、先に触れたスクールカーストの成立においては、「キャラ」が重要な役割を果たしている。コミュカが高い陽キャラ、モテキャラは同水準のコミュカを持つキャラ同士でグループを形成し、これがカースト上位層となる。一方、コミュカが低い「陰キャラ」「非モテキャラ」「いじられキャラ」などは、問答無用にカースト下位に位置づけられる。つまり、クラスにおいて個人のキャラの設定とカースト上の位置づけとはほとんど同時に決定されることになる。注意すべきはそこに決定の主体が存在しないことだ。両者を決めるのはあくまでもクラスの「空気」であり、空気であるがゆえに誰も決定に逆らえないのである。

すでにおわかりのとおり、さきほど私が「承認依存」と呼んでいるものは、正確には「キャラとしての承認」への依存、ということになる。問題があるとすれば、ここでの承認が「自分らしさの承認」とはやや異なる点だ。先に述べたとおり「キャラ」は教室の空気が決定づけるものなので、当事者は自分の「キャラ」に、自分本来の姿とは微妙にずれた違和感を感じたり、空気によってあてがわれたキャラを演じ続けることに疲弊したりすることがある。しかし繰り返すが、与えられたキャラを降りる、変更することは、よほどの偶発事でもない限りきわめて難しい。

ならば彼らは——われわれは——なぜ「キャラ」を捨てられないのか。キャラには、ここまで述べてきた欠点を補って余りあるメリットがあるからだ。その最大のものは、コミュニケーションの円滑化である。相手のキャラがわかれば、コミュニケーションのモードも自動的に定まる。後はそのモードの枠内で会話を続ければいい。

先にも述べたとおり、一般にキャラ自認は、いわゆる性自認などとは異なり、自我親和性が低い。瀬沼文彰によれば、他人のキャラは饒舌に語る高校生たちに、本人のキャラについて尋ねてみると、意外にも「良くわからない」と答えるという（『キャラ論』）。その意味からもキャラとは、自発的に「演ずる」というより、子ども達のコミュニケーション空間の中で「自

認させられ」、「演じさせられる」ものなのである。

しかし、仮に「これが自分」という実感は伴わなくても、いったんキャラ自認が成立すれば、「自分とは何か」という問いからはさしあたり解放される。「キャラを演じているに過ぎない」という自覚は、キャラの背後にある（と想定される）「本当の自分」の存在を信じさせ、また保護してくれさえするだろう。やりとりのなかでキャラが傷つけられたとしても、所詮それは演じられたフェイクの仮面なのであって、「本当の自分」とは関係ないと割り切れることもできる。同時にそれは、人生において誰もが避けて通れない「ある役割を演ずる」という行為の予行演習にもなるだろう。

さらにキャラという発明の便利なところは、互いのキャラの再帰的な相互確認という行為だけで、親密なコミュニケーションを営んでいるかのような感覚をもたらしてくれる点だ。友人間の「キャラいじり」はこれに該当する。相手の言動がそのキャラに似つかわしい（「さすがDキャラ」）、あるいははらしくない（「あんたそういうキャラだっけ？」）、といった指摘をしあうだけのやりとりは、冗長性が高く情報量は限りなくゼロに近い。ある意味、言葉を介したノンバーバルコミュニケーションといった趣もあり、私はこれを「毛づくろいのコミュニケーション」と呼んでいる。要は、親密さを強化するための再帰的コミュニケーションである。

以上見てきたように、「キャラ」とは、ある種のコミュニケーション・モードが凝集された疑似人格、と考えることもできる。すでにお気づきの方もいると思うが、その意味で「キャラ」は、先述した DID（解離性同一性障害）の交代人格にきわめて近い。

DID の患者では、意図的かどうかは別として、甘えたい時には幼児の交代人格が、攻撃性を発揮したいときは乱暴者の交代人格が出てくる。それぞれの交代人格はしばしば典型的で深みがなく、内省能力も不十分であることが多い。その意味で交代人格は、「本来の人格」に準ずる仮想的な存在と考えることもできる。こうした属性は、ことごとく「キャラ」にもあてはまる。

こうした「キャラの受容」については、前掲書『キャラクター精神分析』で詳しく論じた。自己の固有性が担保されにくくなった時代において、固有性をつきつめずに同一性を担保してくれる属性としてキャラが要請された、といった「思想的背景」については、そちらを参照されたい。

ともあれ心理学的な意味における自己同一性の獲得が理想とされた「境界例の時代」は、徐々に「キャラとしての承認」を理想とする「解離の時代」へと移行していったことになる。DID をはじめとする解離症状そのものは、かつてより出会う頻度は減った印象があるが、「キャラとしての承認」を志向する時代は現在も続いている。これは特に 90 年代以降、時代や文化の変遷が緩慢になっていったことと関係があるかもしれない。

「発達障害」の時代

現在も「キャラとしての承認」が理想とされているのであれば、2000年代以降は現在に至るまで「解離の時代」が続いているのだろうか?必ずしも、そうとは言い切れない。むしろ現代的な精神病理を語る際に頻繁に言及されるのは「発達障害」のほうである。

現代の日本は、一種の「発達障害ブーム」と言って良い様相を呈している。私の知人の小児科の教授は、この状況を的確に「発達障害バブル」と表現していた。

発達障害の近年の急増ぶりは、とりわけ日本で突出している。たとえば、かつて「広汎性発達障害」と呼ばれた障害の有病率は、日本では約2%とされる。これは欧米の調査結果のほぼ二倍以上である。文科省が2012年に発表した調査報告では、公立の小中学校に通う普通学級の児童生徒で発達障害の可能性のある子どもが実に6.5%に上るとされている。

発達障害は先天的な脳の機能障害であるとされているため、日本で突出して多いというのは奇妙なことである。個人的な経験から述べるなら、専門医、非専門医を問わず、「発達障害」の診断で紹介されてきた患者の誤診率がきわめて高いという事実もある。私自身が専門医でもないのに、なぜ「誤診」と断定できるのかといえば、彼らが「治って」しまうからである。繰り返すが発達障害は「先天性の脳の機能障害」である。このため「治療」や「治癒」という表現は適切ではないとされることが多い。それゆえ奇妙な話ではあるが、治ってしまったものは誤診、と言わざるをえないのである。

ASD(自閉症スペクトラム障害)の診断において重視されるのは、以下の三つの障害である。

- (1) 社会性の障害
- (2) コミュニケーションの障害
- (3) 想像力の障害

(1)や(2)についてはある程度理解可能と思われるが、(3)はややわかりにくい。これは、「ごっこ遊び」や「見立て遊び」が不得手で、独特のこだわりやそれに基づく奇妙な行動がみられる、といった症状を指している。

ところで私は、こうした発達障害バブルともいうべき日本固有の現象の背景に、先述した「コミュカ偏重主義」があると考えている。

その根拠として、若者間で使用されるスラングの存在がある。スクールカースト下位に位置づけられることの多いコミュカの低い者、協調性に欠けるものは、しばしば「コミュ障」や「アスペ」などと呼ばれ揶揄される。これらの言葉を口にする方からすれば軽い表現かもしれないが、要はコミュカの低い個人は障害者同然の扱いをうけてもしかたがない、そういう発想が透けて見える。

ただ、状況を複雑にしているのは、そうした個人が単に排除されるばかりではない、という事実があるからだ。たとえば最近の小説や漫画の中で、あきらかにASD的なキャラ設定

の主人公が登場する頻度が著しく増えた。人気作品「デスノート」に登場する「L」という探偵が典型である。知能は異常に高いが社会性に乏しくさまざまな「こだわり」を持つクセの強いキャラ。そうした設定のテンプレートとして、ASD の人気はきわめて高い。あるいは芸能人を含む著名人の中にも、ASD をカミングアウトしたり、ASD 的なキャラが受けているとしか思えない人が少なからず存在する。

つまり ASD は、日常世界においては協調性に欠けた困った存在として排除される傾向にあるが、フィクションや非日常においてはキャラとして人気があるというねじれた受容の構造があると考えられる。これは ASD の症状（社会性のなさやコミュカの低さ）とはつきあいきれないが、ASD の才能（サヴァン的な意味での）は通常以上に愛されやすい、ということなのかもしれない。

ともあれ、現代を「ASD の時代」ととらえるのなら、そこで求められる理想の自己イメージとはなんだろうか。「キャラとしての承認」以降の新たな理想像を想定すべきなのだろうか。ここまでの検証の流れに従うなら、ASD が何の陰画であるかを検討すれば良いことになる。ならばわれわれの理想は ASD の反対、すなわち「コミュカと社会性が高いキャラ」を獲得すること、なのだろうか。そうなのかもしれない。しかしそのイメージは、いささか凡庸すぎるきらいがある。そもそもここまで述べてきた陰画とは、必ずしも理想の正反対のイメージとは限らない。解離の時代において「承認されるキャラ」のありようが、DID の交代人格と著しく似た特性を持っていたことを想起しよう。理想と陰画とは、ある程度共通性を持つものなのだ。そして、そのように考えるなら、現代人の自己イメージはかなり意外なものとなるだろう。

私が考える現代人の理想とする自己イメージは以下の通りだ。

「社会性とは無関係に自分だけの欲望（こだわり）を獲得し、それを承認されること」。言い換えるなら、居場所を見つけた（成功した）発達障害者こそが、現代人の理想の自己なのではないだろうか。

おわりに……………変遷の動因としての「切断」

以上、主として 90 年代以降に照準しつつ、自己イメージの変遷ぶりを眺めてきた。ここであらためて、その流れを整理しておこう。

| 時代区分 | 理想とされる自己イメージ | 時代を象徴する病理（理想の陰画） |
|-----------------|-------------------|------------------|
| ～1960 年代 | 物質的に充足した自己 | 神経症 |
| 70 年代～80 年代中期 | 内面的に充実した自己 | 統合失調症 |
| 80 年代中期～90 年代中期 | （心理的）自己同一性を獲得した自己 | 境界例 |

| | | |
|-----------------|---|------------|
| 90年代中期～2000年代中期 | キャラとして承認される自己 | 解離 (DID) |
| 2000年代中期～10年代 | 社会性とは無関係に自分だけの欲望 (こだわり) を獲得し、それを承認される自己 | 発達障害 (ASD) |

こうした自己イメージの変遷の背景にあったものは何なのだろうか。先述した通り、社会的文化的な背景が大きく影響していることは間違いない。しかし、そうした影響とは別に、こうした変遷を理解する上では、私たちが「自己イメージ」に対して、どんな機能を求めているかという点が重要になってくる。

人は誰も自己イメージを必要とする。なぜか。人が生きていく上で、健康な「自己愛」は不可欠なものであり、自己愛を投影する場所として「自己イメージ」が不可欠であるからだ。

(自己同一性とは別に) 自己イメージには大きく分けて二つの機能がある。一般性と固有性の担保である。つまり、自分が「みんなと同じ人間である」という一般的認識と、「かけがえない唯一の存在である」という固有性の認識である。かつて中井久夫は、この二つの相矛盾する認識を両立させることが精神的健康の目安であると述べた。

この点を踏まえて自己イメージの時代的変遷を眺めてみると、この二つの機能のいずれかが交互に重視されることを繰り返してきているように見える。初期の物質的充足・内面的充実までの時代は、一般的な尺度のもとで自己イメージの価値を高めようとした時代である。自己同一性を追求する時代においては、一般的価値以上に自己の心理的固有性 (アイデンティティ) の価値が追求される。しかし一転して「キャラとしての承認」が求められる時代には、人々は「キャラ」という一般性の高い人格の記号を獲得すべく汲々とする。やがて「キャラ」を演ずることに疲弊した人々は、社会性とは無縁な (発達障害的な) キャラの固有性に憧れを抱くようになる。このように、自己イメージにおける価値の比重は、一般性→固有性→一般性→固有性という変遷を辿って現在に至っているように思われる。

この変遷はある意味で必然的なものである。自己イメージを一種の流行として理解するならば、どんなに固有性に重きをおいた自己イメージも流行とともに陳腐化 (一般化) してしまう。その意味で新たな自己イメージの追求は、常に古い価値尺度からの「切断」として開始されるだろう。

物質的充足の偏重が、そこからの切断のように内面的充実の志向をもたらす。実体の乏しい内面の充実なるものからの切断として、心理学に照準したアイデンティティの追求が求められる。しかしそれが心理主義の流行 (一般化) をもたらすと、今度はそこからの切断として、心理学とは無関係に自己イメージを獲得する「キャラ化」が現れる。キャラ化の流行が「つながり」や「コミュカ」の過剰をもたらすと、さらにそこからの切断として「発達障害的なキャラ」が称揚される。こうした接続と切断の繰り返しが、自己イメージの変遷を支え

てきたと私は考えている。

それでは、「次」に来る自己イメージはなんだろうか。ここまでの仮説に依拠するのなら、それは現在の「発達障害バブル」を切断する何か、ということになる。現在あらわれているいくつかの予兆を踏まえて言えば、それはおそらく「身体性」を踏まえた自己イメージの追求になるのではないか。しかし、もはや紙幅が尽きた。この点については、機会を改めて検討することとしたい。

斎藤環

1961年生まれ。筑波大学医学専門学群環境生態学卒業。医学博士。爽風会佐々木病院精神科勤務を経て、2013年より筑波大学医学医療系社会精神保健学教授。専門は思春期・青年期の精神病理学、病跡学、ラカンの精神分析。著作に『世界が土曜の夜の夢なら——ヤンキーと精神分析』（角川書店、2012年、第11回角川財団学芸賞受賞）。『キャラクター精神分析——マンガ・文学・日本人』（筑摩書房、2011年）、『関係の化学としての文学』（新潮社、2009年、2010年日本病跡学会賞）、『生き延びるためのラカン』（バジリコ、2006年）、『戦闘美少女の精神分析』（太田出版、2000年）など。
(肩書は掲載時のものです)